

## 疫病と大国主命（医学＋歴史学＋民俗学＋ $\alpha$ ）

2020年12月5日

市民研究員 田中文也

### 1、はじめに

現在「新型コロナウイルス」が猛威を振るっている。しかし、古事記・日本書記を読めば、過去にさらに大規模な感染症が起こっていたことが分かる。今回この疫病と大国主命の関係を調べ、この疫病が蔓延した背景と原因を検討し、もって国津神（大国主命、少彦名命）の正体を明らかにすることを目的とする。

### 2、大国主命は「崇り神」と呼ばれていた

以下は、古事記・日本書紀に書かれている「大国主命と疫病の蔓延」の項を抜粋したものである。（正確に知りたい人は、是非原本を当たっていただきたい。）

<古事記より>

「崇神天皇の御世、疫病が流行し、国民の半数が死に絶え人民は尽きようとしていた。この危機をどうすれば乗り越えられるのかと苦悶する崇神天皇は、ある夜神床（神の意志を夢で窺うための床）で寝ていたときに、夢に大物主神（オオモノヌシノカミ）が現れて託宣を下す。その託宣は「この疫病は私の意志である。今、意富多多泥古（オオタタネコ）を連れてきて、私を祀らせたならば崇りは止み、国も安らかに平らかになるであろう」というものであった。そこで、天皇が四方に使者を派遣して、オオタタネコを探させたところ、河内の美努村（みのむら）で発見された。それでオオタタネコに尋ねたところ、この人がオオモノヌシの子孫であることがわかったので、この人を神主としてオオモノヌシを祀り、かつ、大和の神々をことごとく祀ったところ、神の崇たたりは治まり、天下は平らかになり、人民が栄えた。」

<日本書紀より（要約）>

「5年、国内に疫病多く、民の死亡するもの半ば以上に及ぶほどであった。百姓の流離や反逆も起きた。宮中に天照を祀ったが効果がなく、外に出した。それで、八百万の神々を祀って占いをした。「もし我を敬い祀ればきっと自然に平らぐだろう」と大物主が言った。この神を祀ったがなかなか印が無かった。そこで、沐浴清めて夢の中で神託を祈った。この夜の夢に一人の貴人が現れて、大物主と名乗り「国が治まらないのは私の心によるものだ。大田田根子に我を祀らせたなら、国内は立ちどころに平らぎ、又海外の国も自ら降伏するだろう」と告げた。又宮中の3人の貴族も同じ夢を見て、あまねく天下に告げると茅の県の陶邑に大田田根子が見つかりお連れした。・・・ここで疫病は初めて収まり、国内はようやく鎮まった。五穀は良く稔って百姓はにぎわった。」

いずれも、ほぼ同じ内容が書かれている。つまり、記紀では、国民の半数以上が死亡す

る疫病を「大物主（大国主命）」が、自ら起こしたと言っているのである。

そこで、神託にあるように、大国主命の子孫である大田田根子を探し出して、大国主命を祀らせたなら、「疫病が治まり国が平らげた。稲も良く実り、百姓も賑わい国も栄えた。」

つまり、この内容から、大物主命（大国主命）が、「豊穰の神であるとともに、祟り神でもあった」ということが分かる。

一般に、これまでの通説では、大国主命（大物主）が祟り神とされているのは、大和政権が出雲の国を攻め滅ぼした結果、崇られるようになったのではないかとされてきた。

しかし、この通説には、確かな証拠がない。大国主命のせいで国民の半数が亡くなるほどの疫病がはやったという事には、何らかの根拠があるはずである。そこで、まず大和の三輪山に治まる大物主とはどういう神かを探る必要がある。

古事記では、国譲りの前の大国主命の最後の条で、大物主の登場の様子が描かれている。・・・国造りが終わって、粟島から少名彦命が常世国に旅立った後、大国主命が「私はどうしてこの国を作り固めようか」とすると、海上を照らして近寄ってくる神（大物主）があり、「私の御霊を大和の青々とした山のその東の山の上に清めて祀りなさい」と言った。又、この前段には、大国主命が出雲の美穂の崎におられる時、「波頭の上からガガイモノの実の船に乗って、近づいてくる神があった」と少名彦命が登場する様子も書かれている。

一方、日本書紀では・・・大己貴命と少彦名命は力を合わせ心一つにして天下を造られた・・・その後、少彦名命は出雲の熊野の岬に行かれてついに常世に去られた。又は粟島に行つて粟茎によじ登られ、弾かれて常世の国に行かれたと書かれている。

大国主命が出雲に至って、「今この国を治める者はただ私一人である。私とともに天下を治める事が出来る者は他にあるだろうか」と、その時不思議な光が海を照らして、忽然と浮かんでくる者（大物主）があった。・・・おまえは何者かと尋ねると「私はお前に幸いをもたらす幸魂奇魂である」いまどこに住みたいと思われませんか尋ねると、「私は日本（大和）の国の三諸山に住みたいと思う」そこで御宮を建てて住ませた。これが大三輪の神である。（大国主命も少彦名命も美穂の崎から入って来たということが極めて重要な点である。）

この記紀の故事にちなんで、大三輪神社では毎年4月18日に「花鎮祭」が行われている。平安時代の律令の注釈書『令義解（りょうのぎげ）』に鎮花祭のことが記され、春の花びらが散る時に疫神が分散して流行病を起こすために、これを鎮遏（ちんあつ）するため

に大神神社と狭井神社で祭りをを行うと書かれている。この注釈書から、この祭祀が『大宝律令』（701年）に「国家の祭祀」として行うことが定められていたことがわかる。

記紀によると崇神天皇の御代に疫病が大流行した時、大物主大神が疫病を鎮められたとある。病氣鎮遏（ちんあつ）のご神徳を仰ぎ、更には荒魂（あらみたま）を奉祭する狭井神社の靈威のご発動も願って、大神神社と狭井神社の二社で鎮花祭が行われたもので、疫病除けの祭典として二千年来の由緒がある。



現在も特殊神饌として、薬草の忍冬（すいかずら）と百合根が供えられる。祭典には奈良・大阪・京都を始め各県の製薬業者や医療関係者が多数参列し、多くの医薬品が奉獻されることから、今では「薬まつり」の名でも知られている。また、当日祭典後より疫病除け「鎮花御幣（ちんかごへい）」と「忍冬酒」が期間限定で授与される。

### 3、「田の神様」と大国主命・神在月と神無月の関係について

田の神伝承とは、「田の神様は、春になると田んぼにやって来て、稲作を見守り、秋になると帰っていく」稲作の神様である。この伝承は、北は青森から、南は鹿児島までの全国各地に現在も残っている。それぞれの地域では、サンバイ様、ソウトク様、イノコ様、幸神さん、道祖神、歳の神、等、様々な名前と呼ばれ、地域で今も祀られ続けている神様の一群である。この田の神伝承は、世界中でも日本の国にしか存在しない話である。これをさらに辿っていくと・・・①「田の神様は、春になると山から下りてきて、秋になると山に戻っていく」という話と、②「田の神様は、春になると出雲から来て、秋になると出雲に戻っていく」という話の2通りの話があることがわかる。

2つ目の「田の神様が、出雲から来て、出雲に帰っていく」という話が、「神無月・神在月」のもとになったと考えられる。すると、相当古い時代からこの伝承が伝えられ、日本中で記録されているため、田の神＝国津神も、実在した可能性が高いといえる。

<青森県の垂柳遺跡、紀元前の日本最北端の水田跡、田んぼの畦と足跡が残されている>



水稻稲作や金属器や医学等を伝えた国津神＝田の神とはいったい何者なのか。当時日本に無かった「水稻稲作」や「金属器」や「医学技術」等を伝えた集団の解明が必要である。

これらの技術は、日本のものではなく「中国の最先端技術」であった。その結果として、天津神に代わって日本の国を造ってしまったので、後ほど彼らは「国津神」と呼ばれる事



になった。したがって、この集団は、日本国内の者ではなく、中国大陸から渡来してきた人々だと考えられる。しかも、当時最新の「サイエンスとテクノロジー」を携えて来た集団で、計画的に、「大人と子供がセット」になって、「春に日本中に出かけ、収穫後の秋に山陰地方に帰ってきていた」集団である。

<石川県珠洲市のアエノコト祀り>



<東北・信州の田の神迎えと、田の神送りの神事>



<九州始良市のたのかんさあ>



<鹿児島川内市のたのかあんさあ祭り>



この様に、田の神に関する祀りごとは、現在でも北海道と沖縄を除く日本中で行われている。田の神とは、天津神に代わって日本の国を造った神々のことである（正確には国を造ったので後ほど国津神と呼ばれた）。

大国主命は「天の下つくりし大御神」とも呼ばれており、記紀では「大国主命と少彦名命」と書かれている。又、各地の風土記にも同様に登場する。民間にも数々の伝承が残り、「大黒様」や「大黒柱」として、今も各家々に残されている。この日本中を歩いた神々が、結果として日本中に疫病を広めたのではないかと考えられるのである。

#### 4、田の神様＝と大国主命（少彦名命）は渡来人（徐福とその一団）であった

<青谷上寺地遺跡の連子窓>



<青谷上寺地遺跡の脊椎カリエス>



<青谷上寺地遺跡の糞石>



青谷上寺地遺跡には、この他、トウケン、連子窓など、中国の文明文化が入ってきている。青谷の人々は、DNA検査の結果、大陸から来た人々であったことが分かった。縄文時代には、日本に結核や寄生虫などの病気はなかったが、青谷の渡来人は、これらの病気を大陸から持ち込んでいた。

したがって、国津神が渡来人であれば、日本中を歩いた結果、疫病を流行らした可能性がある。つまり、中国から渡来してきた人々が、日本中を歩き回り、当時日本にはなかった病気（結核、寄生虫等など）が日本中に蔓延したのである。

この神々が全国各地で「田の神」と呼ばれ、大国主命&少彦名命と呼ばれ、記紀や風土記には「国津神」と記録されたのである。彼らが日本中を歩かなければ、この国の疫病の蔓延は起こらなかった。

つまり、この人々が、春に日本中に出かけ、秋に山陰地方に帰って来るという「国造り」の作業を200～300年間続けてきた結果、国民の半数以上が死ぬという疫病が日本中



に蔓延するという事態が継続的に続くことになった。

大国主命が米俵に乗って、大きな袋を担いで、打ち出の小槌を持っている「福の神」の様相と、疫病を広める「祟り神」の様相は、実は表裏一体のものであった。

しかし、病気は目に見えないので、一般的にはこの2つの出来事が同一とは考えられなかった。したがって、福の神である「田の神」を迎え送る行事が全国各地に残り、一方で田の神迎への2～3週間後に疫病を鎮める「花鎮めの祀り」が行われた。

又、朝廷は疫病を広めているのは国津神である「大国主命と少彦名命」ではないかと考えていた可能性が分かる。故に、この内容は「大国主命の祟り」として記紀に明記され、恐れられた。

中国の記録である史記には「紀元前210年頃、始皇帝を騙して数千人の少年少女と五穀と百工を連れて日本に行って帰ってこなかった。平原広沢の地を得て、日本で王になった」とする徐福の記録が書かれている。

#### < 渡来人の遺跡の分布図 >



本当に仙人に出会って「不老不死の薬」を得るなら、「金銀財宝」を持った上で「身边を警護する軍隊」と一緒に来たはずである。しかし、徐福は「数千人の少年少女と五穀と百工」を連れて日本に来たのである。これは、明らかに新しい国造りを日本で行う目的をもって、その準備をして来たと言える。

日本中を歩いた大人と子どものコンビは「大国主と少彦名」と呼ばれた。又、水稲稲作を伝えたために各地で「田の神様」とも呼ばれ親しまれ、今でも日本中で祀られている。

日本の国を造った結果「日本で王となった」とも史記に書かれている。むろん徐福には

王になることも疫病を広める意思もなかったと考えられるが、結果としてこのような事態を招き、記紀などの国書の記録と、日本中の伝承行事に残される事になったのである。

## 5、おわりに

現在猛威を振っている「新型コロナウイルス」のような様相が、古事記・日本書記を読めば、過去にも起こっていたことが分かった。この記録には、疫病を大国主命が広げたと書かれていた。

この関係を調べた結果、疫病が蔓延した背景には、日本に病気や寄生虫を持ち込んだ渡来人との因果関係が明らかになった。これら渡来人が、日本中を歩いた結果、当時の日本人の半数以上が亡くなるという疫病の蔓延を招いた。この人々は全国では田の神様とあがめられ、記紀には日本の国を造った国津神と記録された。

つまり、疫病を広めた国津神（大国主命、少彦名命）とは、史記にある始皇帝を騙して日本にやって来て、日本の国を造り王となった徐福とその一団だと考えられる。

彼らが日本中をくまなく歩かない限り、田の神祀りや神無月神在月や疫病の蔓延はなかったであろう。

以上

元医療放射線防護研究専門委員会研究員（東京大学医学部&物理学部）  
元厚生省健康政策研究事業医療放射線防護の研究班研究員  
安齋平和・科学研究所客員研究員（放射線被曝解析）  
島根県立大学北東アジア地域研究センター市民研究員  
元全国邪馬台国連絡協議会副会長（中四国支部長）  
古代史・神話ネットワーク代表幹事  
山陰精神／心理・薬理研究会幹事  
山陰古代史研究会代表  
古代史研究家

田中 文也